

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	白銅貨
Author(s)	後藤, 壽夫
Citation	龍南, 184: 80-87
Issue date	1922-12
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8604
Right	

白銅貨

後 藤 壽 夫

——K市の造船工場で、こぼれおちる鐵器の錆の如く死んで行つた友の手帳から——

細々と青い煙をひいて、三本目がまた消えた——私はもう、マッチ千箱をたきつけた、いやうな、いらいらしさに襲はれて居たのだが、やがて歸つて來るであらう父の、こけた頬を思ひうかべると、やはりまた、釜の下粗朶をかきたて、四本目のマッチをすらなければなりません。十三才の私には、母が居なくなつた日から、急に荒つぱくなつてどうかすれば、拳を飛ばしかねない父は恐しい、暴君以上のものどしか思へなかつたのでしたから。

白くなつた外の光は、朽ちた敷居の戸口から流れこんで、土間の土を破つてめり出た竹の様な爬虫の腹に似た肌に蒼白く淀んで居ました。四枚の疊が、黒くその半を占めて居る、黄色い新聞紙の陰で壁土がかさこそと崩れおちる小屋。その土間のすみに私の背中は煙る竈を前に圓く浮いて居たことでせう。

街に電燈が光り出したら、父が工場から歸つて来る——私の學校から歸つての仕事は、その夕暮れて歸つて来る父を待つて夕餐の仕度をしておくことでした。

その四本目のマツチも亦、盛り上げた粗朶の間で、例の細々と青い煙を、意地悪く引いて消えたが、私はもうすつかりあきらめきつて、火の方が燃ゆるまで待つんだと言つたやうな氣持で、また次の一本をすりました。家のすぐ横が水の浅い井戸でその側の盛り上つた土饅頭の上に、二三十本の孟宗の竹が、青い羽を列べて居て根元の小さな芝や、赤い實の藪龍膽は、晝でも冷々と小さな水粒を光らせて居ました。その露がと言つたわけでもないでせうが、私の土間を掘り下げた竈は、夕饗時になると、いつもこゝうして底にまわつた、ひどい濕氣で私を困らせるのでした。

が、五六本も消してはすつて居るうちに、やがて竈も焰の舌を吐き始めたので、私は助かつた人の様に立ちあがつて黒い疊に腰をかけました。そしてやつと一安心と言つた氣もちで、級の友達から無理に借りて來たお伽噺の本を膝に乗せました。

——湖の老王の三人目の王女——睡蓮の吐息のやうに美しい姫は、村の鍛冶屋の三番目の息子が好きになりました。二人のお姉さまが、二人の兄弟をだまして、赤牛したやうなことは、その昔者のたくましい身体つきと、水の底から仰いだ夕星のやうな眼どを見ては、どうしても出來なかつたのです——細い細い金の線で表装してある本の美しい夢は、私を妖精の國へつれて行きましたが、ふとその本を借りた時のことを思ひ出して暗い氣持になりました。

『何だい、自分で買つたらいいぢやないか。人のばかり借りたがる奴だなあ』

ど、私の強ひての願ひにこの本をしふしふわたしは言つたのです。

『俺だつて……俺だつてお金がありや買ふんだい』

その暗い氣持を、追つばらほうと腹の中でこう繰返してやつとなぐさめられたやうな、またぼつとり取り残されたやうな氣持ちになりました。竈の方に眼をやると、暗がたいよひ始めた土間の隅に、元氣のいゝ火がおどつて居ます。私はまた膝の本に眼をおとしました。

——こう思ひながら、ばんやりと王女が岸近い水の上に姿を現して居る間に、若者はすんぞん近づいて、その手をとりました。

こうして三番目の王女は、地上の人間のお嫁になつてしまつたのです。

白い鬚が、水苔で青んだ湖の老王の怒りは、妹を奪はれた姉女王たちの悲しみ以上でした。燐光の蒼白い水底の玉坐の上で老王は、眞珠の首飾りをぶつとりとひさちざりました。そして叫んだ！

地上の人間共に呪ひあれ！——

私は、またそつと、その本を下におくより外に仕方ありませんでした。どうしてそんなこと——この本を買ふなんて言ふことが何分に出来るものか、借りることさへやつとのことなのだから。土間の竹の根のにふい蒼白さは、暗の深くなつたのを示すのでせう。竈の油煙の臭と、釜からもれる、かすかな湯氣——飯の出来るのも間がありますまい。私の眼は、再び、力なく金線の本におちました。

——湖の老王の復仇は始つた。水と言ふ水の精——白い薄衣の、露の踊り子まで、すつかり、湖の底に召集せられました。人間の世界には、恐しい早魃^{びでり}が來たのです——

『焦げるぞッ!』

私は飛びあがりました。恐しい、そして聞きなれた聲、それは私の全ての幻影をふき飛ばして、私を壁土の崩れおちる小屋につきもどしたのです。父の青い工場服と、他人の眼のやうに鋭い眼の輝きとを私は目の前に見ました。

焦げるぞッ!なるほど、ほんのりと飯の焦げる香が土間に流れて居ます。あはて、釜の下の火をひいて、ま、あまりに焦げては居ないやうだと安心して、父の方をじつと盗見すると、それを待つて居たかのやうに、例の悪罵がふりかゝりました。私は龜の子のやうに首をちぢめましたが、盗み見た父の顔の消え入るやうな淋しい表情を感じると、それに反抗するやうな氣は少しも起りませんでした。

『氣をつけろい! 穀つぶし。一釜焦がして見ろい、俺の半日分の働きはフイだ!』

ドシン、と肩の荷物が下されました。悪くすると拳が飛びさうな時です。私は鼠のやうに井戸端に、飛び出して、水につけておいた茶碗を、こそこそと洗ひ始めました。孟宗竹の、微かな羽のゆらぎが、流れる夕闇を通して感ぜられました。

『オイ、酒買つて来い。味噌はまだあつたらう』

小屋の中で、父の聲がしました。續いて、工場服を着かへて居るらしいけいです。

私は、だまつて内へ入つて、棚から瓶を下すと、疊の上の二十錢の札を握つて、かけ出しました。その時の私の顔に光つて居たのは皿洗ひの水の、とばつしりではなかつたらうと思ひます。

孟宗の竹藪を廻つて、田の間の白い路を行くと、居酒屋のお婆さんの家がある。夕まぐれ、豆狸まめだのや

うに、小さな酒瓶をさげてやつて来る私は、酒屋のお婆さんとはすっかりなじみでした。

『お酒、一合』

と、差しだした私の瓶を受取りながら、その日のお婆さんの顔には、いつもの人なつつこい、微笑が浮きました。眞輪ぶちの考眼鏡が蜘蛛の糸と、埃とで霞んで電燈の光を、軟かく反射しました。

『おつ母あ、まだ歸らんかな。父つあんの氣の荒くなるのも無理はねわが、叱られ役のお前が、可哀さうでな』

酒をつぐ手が、小さくゆれました。おつ母あと言はれると、私は急に胸苦しくなつて來ました。が、何と言ふ答へが私の口を破つたことでせう。

『ウン。歸らんでも好い。父つあも言ふてた、あんな不貞腐れた女は、歸らんでも好いつて』

そう言はなければならぬやうに私はこう言ひました。そう言ひながら、自分では、酒樽の横にそつと錢を置いて、暗い土間の隅を向いてしまひました。

『そこそ言ふちやらう。ちやが、お前と言ふ小供を置いて逃げ出すおつ母あも無理なら、あゝまで、いぢめ通した父つあんも無理じや。無理でないのは、お前ばかりよ』

お婆さんは、古い錢箱の中から、チヤラチヤラと釣錢を出して、瓶と一處に差出しました。雨の線を通して見るやうに、すつかり霞んでしまつたその瓶を、受取ると同時に、釣錢をしつかと握つて、前の通りに飛び出した私は、左の袖で思ひきり強く、兩方の眼をこすりました。

夕暗が、路の上を渦巻き流れて、灯ともし頃の空氣は、私のこの哀傷を更に深めるのに充分でした。

感傷は甘いものださうです。だが私の心にしのびこむものは、苦さと鋭さとの哀傷だけだづたのです。十三才の私はたゞ泣きました。感傷が、生活苦を前提としなうと言ふことがわかつたのは、やつと現在の私なのですから。

家が近づく、私はいつもの習慣で、左手の釣銭を検べました。二つの白銅貨と、二つの銅貨とが、鈍く掌の暗で光つて居ます。五銭が二つ——オヤツ！私はびくつとして、その白銅貨の一枚をとりあげました。その頃は、古い五銭銅貨と、新鑄のそれが、同じ穴のあいた型で流用されてゐる頃です。そして私は境遇からか、金の型などには極度に敏感でした。

私は、すぐ酒屋のお婆さんの、眞輪ぶちの老眼鏡を思ひ出しました。そしてあの土間は薄暗らかつたそつとつまみあげたその白銅貨は、果して「十銭」と讀めました。私の心臓は、こどこと、と鳴り出し、夕闇の中で兩頬のはてりが確かに感ぜられました。

お婆さんの眼鏡がちらつく。手の中の白銅貨の、不思議なむづむづした感じ——氣がつくと、私はもう、孟宗の簍の側に來て居るのです。

ひろつたお金を、もどして幸福を得たジョニイの話は、確かに私も知つて居ました。そして、學校で毎日聞く修身の話も。だが、私の心の底のどこかを破つて湧き出る力強い喜びに似た感情を、どうしてもおさへつけることが出来ませんでした。

不思議な喜び、——五銭の白銅貨がどうして、そんな大きな喜びをもたらし得るものでせう。それは今の私にもわかりません。兎に角、その喜びは、私の總てを、根こそぎに持つて行きました。私は、當然

酒屋の方へ向くべき足を、ぐんぐん私の小屋に向けました。竹藪を廻ると、ゆがんだ入口が見ゆる。もうランプの光が、破れた障子から、濕つた土にはつて居ました。

戸口を入ると、私は自分ながらおちついた態度で、左手に五錢を残したまゝ、銅貨を疊の上に列べました。

『お釣り、十二錢』

そして、煮立つた土瓶に、酒の瓶をつけました。

沈煙で、黄色いランプの光に、片頬を浮かせて、私の借りたお伽噺をくつて居た父のすがたは、めいるやうな淋しさでした。が、私の姿を見ると、惶てゝ、見てはいけないところを見られた人のやうに、その本を閉じて、殊更に荒い聲でどなりました。

『上つて、飯にしろッ!』

が、私は、その語尾の、この上もない心細さを、聞き落しませんでした。

『エー、すぐ』

と、私は、そのまゝ井戸端に出て、一寸茶碗を洗ふ音を立てゝ、そつと、竹藪の根元にまわりましたもう露を下した簾龍膽の根で、濛い暗が動いて居ます。私は、その露草の間の、小石を一つ、手早く起して、その下の窪みに、そつと、そつと、その白銅貨をおきました。石を下す瞬間に、お婆さんの老眼鏡が、見ぬなかつたとは申しますまい。だが銅貨を埋めた下を、も一度、上から強くおさへつけて見たとき、何んと大きな安心の氣持ちと喜びとが、私を包んだことでせう。

小屋の中には、工場から歸つた父が、獨りで、一合の酒をなめて居り、壁土は、かさこそと落ちる。私は立ちあがつて、内へ入りました。そして、小さな飯臺を、だまつてランプの下まで運び出して、もう一度、父のこけた頬を眺めました。